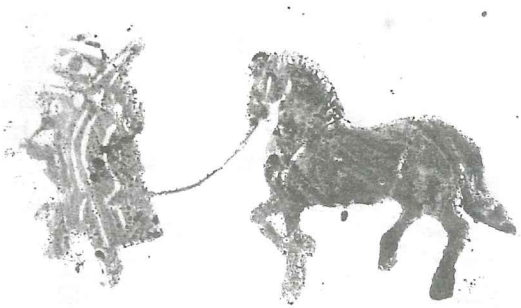
郷土館発
厩猿信仰の記憶

郷土館の信仰に関する展示の中に「厩猿（うまやざる）」があります。木の板に猿の頭蓋骨を取り付けたものと、板には取り付けてないが、きれいに洗骨したらしいものの二体です。

厩猿は、東北や九州地方ではよくある習慣で、牛馬の病よけや魔よけとして猿の頭蓋骨や左手などが厩の梁（はり）などに掲げられていたそうです。当地方でも、猿を馬の守り神とする信仰があったことの証拠です。

猿と馬の関係は深く、山の講で注連（しめ）縄に吊るす紙絵馬には、猿が描かれていることがよくあります。春のものには馬だけが刷られていることが多く、「放し駒」と呼ばれていますが、秋のものには繋（つな）ぎ止める杭（くい）や手綱を持つ猿が描かれていることが多いという特色があります。



山の講の紙絵馬（平山）

郷土館の厩猿（田内）

当館の厩猿の存在をどこで知ったのか、京都大学霊長類研究所の川本先生という方が、研究員三人とともに訪ねてみえました。この方の専門は遺伝子を解析し、猿の系統を明らかにしていくというものです。日本各地に旅して、さまざまな厩猿の遺伝子を分析してみえます。

当館の厩猿を見た川本先生は、愛知県で確認したのは初めてだと、半ば興奮して語ってみえました。また、この猿の遺伝子を分析したいとの申し入れがあり、厩猿の例があれば教えてほしいともおっしゃっていました。

馬の文化から牛の文化へと変化し、今は牛馬を飼うことが殆どなくなった地域です。遠からず厩の記憶も失われてしまいます。厩猿の記憶がある方はぜひ郷土館にお知らせください。

（奥三河郷土館
館長　平松　博久）